

アメリカ合衆国敵性外国人抑留所内の 短詩型文学覚書

桑井輝子

はじめに

第二次大戦中には、7000名を越える日本人および日系人がアメリカ合衆国（以後アメリカと略記する）司法省抑留所に収容された¹。これらの抑留者のなかには、日本から派遣された「国際商人」やマスコミ関係者、留学生も含まれていたが、多くは、日本人会幹部、日本語学校教師、日本語新聞記者、神官、僧侶など、現地日本人移民社会の指導者や有識者と目される人々であった²。

司法省ならびに陸軍省の抑留所に収監された日本人に関する研究は、日系人強制立ち退き収容の研究ほどには蓄積はない³。確かに、戦時中には、朝日新聞ニューヨーク特派員であった中野五郎による『敵国アメリカ通信』（東洋社、1943年）のように、日米戦時交換船で帰国したマスコミ関係者による抑留体験報告書があり、また戦後には、田名大正による『サンタフェローズバーグ抑留所日記』（山喜房仏書林、1976年）や佐々木ささぶねによる『抑留所生活記』（1950年；文生書院、2007年複製版）のような、日記や体験記が出版されている。また抑留者家族間の書簡も出版されている。しかし、これらの体験記や日記を分析し、体験者からみた抑留の実態を総体的に考察した研究はまだない。研究としては、強制収容から生じた市民権放棄問題との関連で、むしろ付随的に扱われてきた感が否めない。テツデン・カシマの *Judgment without Trial* (University of Washington Press, 2003) の精緻な研究も、抑留の問題を強制収容問題とからめて、権力による戦時における市民の監禁という視点から調査研究している⁴。敵性外国人の抑留の問題よりも、一般市民に対する戦時強制収容という市民権侵害の方が、憲法と民主政治の根幹に関わる問題として、研究者の関心を惹きつけるのであろう。

抑留所における文化活動に関しては、研究蓄積はさらに少ない。わずかに伊藤一男の一連の著作や戦後編纂された日系人史のなかに、紹介的な言及が見られる程度である。先行研究の乏しさは資料的制約にも起因するのであろう。アメリカ合衆国連邦公文書館の資料を綿密に研究したカシマや同公文書館の係員によれば、公文書館に保存された文芸資料は皆無に等しいという⁵。しかし文書館に文芸に関わる資料が保存されていない（あるいはまだ発見されていない）ことは、抑留所で文芸活動がなされなかったことを意味するわけではない。抑留所内で日本人によって発行された『ローズバーグ時報』や、『サンタフェ時報』のような新聞を通覧すると、句会が催され、演劇が上演されている。ただし、『時報』にはこれらの活動の詳細は掲載されていない。

本稿は、筆者が偶然手にした個人の所蔵資料や、調査した資料館等に保存されていた句会記録

や同人誌から、抑留所の文芸活動を、極めて断片的ではあるが、短詩型文学に限定して通覧し、その内容を紹介的に考察するものである。

1. 人の移送と人脈

テッデン・カシマの研究によれば、1941年から1943年のあいだに、司法省が敵性外国人を収監した施設は、少なくとも、全米で65カ所、そのなかで日本人を収監したのは19施設を数えたという⁶。これら諸施設のなかで、本稿と関連するのはフォート・ミゾラ (Fort Missoula 以後ミゾラと略記する) 抑留所、ローズバーグ (Lordsburg) 抑留所、サンタフェ (Santa Fe) 抑留所である。ミゾラ抑留所は、1877年にインディアン対策用に設置された陸軍施設である。第一次大戦中の訓練基地、1930年代の Civilian Conservation Corps (市民保全部隊) の北西部地区本部を経て、第二次大戦中は司法省の移民帰化局の管理となり、開戦後逮捕された敵性外国人の収監施設となった。1941年12月18日にソルトレークシティから25名の一世が移送されたのを最初に、1942年春には約1000名の一世を含む2000名を収監した。審問の結果、日本人の多くは陸軍の管轄するキャンプ・リヴィングストンに移送され、1942年末には29名が残るのみに減じた。1943年3月末には再び収監が行われ、1944年2月には258名の一世を数えたが、3月にはサンタフェ抑留所に移送された。施設は1944年7月に閉鎖された。冬季は華氏17度にさがるが、夏期は80度程度であり、比較的過ごしやすい場所である。

ニュー・メキシコ州にあるローズバーグ抑留所は陸軍省最大の一世抑留所であったが、後にドイツ軍の捕虜収容所となった。1942年6月中旬にハワイやアラスカから、続いてサンタフェ抑留所等の抑留所から日本人が移送され、ドイツ人捕虜も移送され、最大時には約2500名を収容した。被収監者は軍隊方式で大隊を結成し、自治体制をひいた。やがて1943年7月までには、日本人は他の施設に移送され、抑留所は1944年半ばに一時閉鎖された後、ドイツ人戦争捕虜の収容施設となった。冬季の最低気温はミゾラほどではないが、4月には平均最高気温が80度となり、夏の盛りには100度を超える暑さとなる。

サンタフェ抑留所は、ニュー・メキシコ州サンタフェ市郊外にある。施設の前身は1400名を収容できる市民保全部隊施設であった。1942年3月14日にロサンゼルスからの一世425名が到着した以後、約800名まで収監者数は増加したが、9月24日には日本人は別の場所に移送され、代わってドイツ人とイタリア人が収容された。日本人は再び1943年3月23日にローズバーグ抑留所から375名⁷が入った。この移送を最初に各地からも移送され、2144名を数えるに至った⁸。1945年1月には市民権放棄者866名がツーリレーク隔離収容所から移送され、1945年3月にはツーリレーク移送者による「騒乱」が発生した。収監者のなかには、戦争直後日本に「送還」されるものもあった。1946年3月にサンタフェ抑留所は閉鎖された。『南加州日本人史後編』によれば、抑留者たちは、ミゾラ抑留所やルイジアナ州のリヴィングストン抑留所、ニューメキシコ州のローズバーグ抑留所などに送られ、「とどのつまりはサンタフェーに集められたようで」、サンタフェ抑留所が「最終的のキャンプであった」という⁹。冬季はミゾラよりも寒く、夏はローズバーグに近い、寒暖の差の大きな砂漠性の気候であった。

現在筆者の手元にある抑留所で結成された俳句結社、ミゾラ吟社、リヴィングストン吟社、ユッ

カ吟社（ローズバーグ抑留所内）、サンタフェ吟社の各名簿を比較すると、実際に、ミゾラ吟社の成立がもっとも早く、1942年1月から7月まで存続し、リヴィングストン吟社とユッカ吟社が1942年夏から1943年春から初夏まで、サンタフェ吟社は1943年初夏からとなっている。（いつまで存続したかについては記載がない。）存続期間はサンタフェ吟社がもっとも遅く長い¹⁰。ここで、名簿一覧を比較検討すると、同人名が重複しており、移動地毎に新たな吟社を結成、活動を継続していたことがわかる¹¹。同人のうち、サンタフェ吟社同人数がもっとも多く、80名である。この吟社との同人の重複をみると、ミゾラ吟社とは22名、ローズバーグ抑留所のユッカ吟社とは22名、リヴィングストン吟社とは17名である。さらに、サンタフェの川柳吟社の同人との重複をみる¹²と、23名が重複している。戦前の日本語新聞『新世界』、『日米』、『北米時事』などの文芸欄を通覧すると、投稿者のなかには、俳句に特化せず、短歌や、川柳にも投句し、さらには自由詩も作っている人が少なくないことがわかる。それにしても、川柳と俳句で、四人に一人の重複は、割合としては大きいのではないだろうか。こうした重複が戦前および戦後の文芸活動全般とどのような関連があるのか、そして1カ所に抑留された結果、生じたであろう太く広い人脈の形成が戦後の日系人社会のあり方とどのような関連をもったのかについては、今後の課題である。

2. 資料に関して

ミゾラ抑留所の「ミゾラ吟社俳句互選」会記録¹³は、野線入りのノートに手書きで記された国会記録である。最初に同人名一覧が記載され、次の頁には“Hokku Verse record [ママ]”と横書きされた下に、回数と課題が記されている。第2回は1942年1月18日に開かれ、第16回は1942年5月20日に開かれている。13回が4月20日、10回が3月20日から判断すると、月4回、毎週開催されたと思われる。18回の「夏の山」と「汗」は課題名は記録されているが、句そのものは記録されていない。この資料の保持者が移送されたためであろう。会が消滅したのかは定かではない。

なおこの「ミゾラ吟社俳句互選」とは別に、全米日系博物館に平田東洋が所有していた「美空俳句会」「ペプロ吟社」句会資料が所蔵されている。謄写版刷りで、「モンタナ州俳句会印刷春季俳句季題抄」、『夏季題抜抄』があり、同じファイルには「千九百四十四年一月二十日ペルー俳句同人送別記念美空俳句会」の寄せ書きもある。ペルーから移送された俳句愛好者が「同人」として加わっていた記録として興味深い。ただ、この寄せ書きには俳句と号があるが、姓が記されていないために、誰がペルーから移送されてきたのかは、これだけではわからない。美空俳句会資料は、「第二回美空俳句会句稿」から第27回記録まであり、第27回「雑詠」の記録には「二月九日七時十五分第二十八号舎にて」とあり、「同夜は当所に於ける最後の句会で『お別れの会』と致します」とある。第2回の開催日は記載がない。第7回俳句会は同時に第3回互選となる。10月14日に開催された。他の記載等から判断して、1943年晩夏から1944年2月に会が開かれていた。「旅中吟」があり、4月27日付けの「ペヤプロ吟社」句会記録となる。「ペプロ」「ペャプロ」「プエプロ」など様々に表記されるこの吟社の記録は50回までである。ただしすべての句会記録が残されているわけではなく、途中欠落がある¹⁴。この記録の年月日から判断すると、「ミゾラ吟社俳句互選」会が他の抑留所に移送された後に移入された収容者によって俳句会が催されたといえる。カシマの研究では、1943年末の非収容者数はピーク時でも260名足らずである。そのなか

で、20名内外の収容者が俳句を楽しんでいた。俳句の広がりを感じる¹⁵。

「ユッカ吟社俳句互選」資料は梶原繁吉〔風人〕が残した記録で、綴じられたノートには、「宮森〔麻太郎〕教授選〔・英訳〕」の俳句の書写、俳句論、「季題及例句」、自身の投句稿、ローズバーグユッカ吟社の俳人氏名一覧、ユッカ吟社俳句互選1回（1942年7月14日）から23回（1943年3月）までの課題一覧、ユッカ吟社の互選句会記録第1回から第10回までがある。さらに、大川音痴〔駿太郎〕作「美空館府音頭」、松下蓼葉〔巖〕作「美空石拾ひ音頭」、作者無記名「美空館府飯炊きの歌」、「衆励節」「生命線」、「上海の花売り娘」の歌詞が記されている¹⁶。

「川柳互選高原吟社」は野線入りのノートに手書きで残された、第1回1943年7月19日から第62回（年月日不明）までの、句会記録である。表紙には「昭和十八年七月／川柳／互選／高原吟社／サンタフェー収容所」とある。とはいえ、句会は62回まで続いており、終戦のころまでの記録と推定される。表紙には互選とあるが、選者による選もある。選後感や句評が付記されている場合もある。また収容所の川柳人からの書簡も添付されている場合もある。互選採点表からは参加者数と名前が把握できる。句会の回数順に記載されているとはいえ、同じ回数でも日時が異なる場合があるので、今となってはいつ句会が催されたのかは判断がつかない。席吟が詠まれた日付、締めきり後に句が並べられた日付、採点数順に句が並べられた日付などが残されているからであろうか。手書き文字の筆跡は、回数によって異なる。誰がそれぞれの句会記録を残したのかはわからない。メンバーには入れ替わりがある。作者名を見る限り、抑留所で川柳に関心をもった初心者もいたであろうし、パロールされて転出したベテランもいたであろう。この句会記録は代々の中心人物によって受け継がれてきたと思われる。

大館無涯〔誓〕編『古多満』は「サンタフェー文芸協会」から1944年2月11日に発行された。印刷は「サンタフェー時報社」とあるが、謄写版刷りである。抑留所から見えるロッキーの山並みや、サンタフェの町の口絵があり、相賀溪芳〔安太郎〕の序文、目次、漢詩、短歌、俳句、新興俳句、川柳、編集後記と続く。作品は一人2首に限定されている。

短歌、俳句、川柳に限定して抑留前の住所を調べると、ハワイやカリフォルニア州「出身者」が多いことがわかる。これは日本人移民数が多い地域なので当然といえるかもしれない。しかし川柳の愛好者の分布は、俳句や短歌と異なり、ワシントン州が多い。州別の人口比率から考えると突出しており、逆にハワイが少ない¹⁷。アメリカにおける川柳の歴史を物語るものである¹⁸。

「編集後記」によれば、「昨秋〔1943年〕ポストン第一婦人会」から贈られた短冊展に刺激されて、所内にあった前述の文芸愛好会メンバーにより「サンタフェー文芸協会」が創立され、各メンバーが作品を寄せ、刊行の運びとなった。第二集を出版する予定だとある。第二集は1945年に出された。序文によれば、全米各地から居住地、職業、年齢、個性、を異にする人々が「皆思はざるの大衝動を受け、急転直下の世態に遭ひ、家を離れ、妻子と別れ、孤立無援の立場に」置かれたとはいえ、同じ場所に抑留され、生活を共にした、「斯る超非常時の種々相を後人に伝へんが為」、この「こだま」を公にしたという。

プエブロ吟社同人編『銀塔』（俳句）は1945年6月16日にプエブロ吟社から発行された。印刷は「サンタフェー時報社」である。これも謄写版刷りである。表紙には『古多満』とほぼ同一の構図のサンタフェの町の絵が用いられている。『古多満』の絵は露木白雨〔繁雄〕、『銀塔』は池野〔名不明〕の筆になる。二人の作品の構図がほぼ同一ということから判断すれば、抑留所から

見える景色が描かれているのであろう。丸屋根の塔が、州庁舎の「銀塔」であろう。村上紅嵐 [甚次] の序文に続き、同人28名の雑詠各10句が一人2頁で掲載されている。森田紅茶 [善吉] など数名が『古多満』にも句を寄せているが、重なりは少ない。

序文の中で、村上紅嵐は、芭蕉の旅に言及しつつ、自分たち旅が、行程も期間も自由のない旅ではあるが、「偉大なる自然」の刻々と変わる歩みを感じることで、祖国や妻子を思う「絶対自由」の境地にある、と述べている。そして、ともに「俳句を楽しみ、捕はれの苦を脱却し」ようとしている句友との「不可思議な集まりの夫れを [句を] 記念する為に」『銀塔』をつくったという。

なお『銀塔』には俳句とは関係がないと思われる古河内貞一「アメリカインディアンの研究」も加えられている。インディアンのコーンダンスの唄を紹介し、その内容にそった俳句を掲載している。内容的には合致しているといえる。

『古多満』、『銀塔』とも作品の作成年月日がまったく記されていない。

3. 短歌・俳句・川柳が詠む抑留所の生活

ミゾラ吟社の最初の句会は1942年1月に開かれたようである。ミゾラ抑留所に日本人が抑留され始めたのは、前述したように12月下旬であるから、移動後1ヶ月を経ないで、句会が催されたことになる。兵舎のような閉ざされた空間のなかでは、顔なじみがいれば、句会結成は即決に近かったのかも知れない。本来は礼装して交わすはずの年賀の言葉も、

寝ながらに御慶交はすや収容所 (十一 第1回新年雑詠 ?)¹⁹

何かほほえましい。まるで家族のような雰囲気が伝わってくる。一つのバラックは40人収容というので、一同が会する場があったのであろうか、おそらくは食堂で新年の四方拝をしたのであろう。そして、手紙や小包が配られ、妻子を想った。

六百のはらから黙し春迎ふ (偏也 第1回新年雑詠 ?)

妻よりの来たる餅待つお正月 (愚山 第1回新年雑詠 ?)

無事なりと検閲済みの初便り (紅雨 第1回新年雑詠 ?)

ミゾラ収容所の施設は貧弱だったというが、厳冬下でも、雪だるまをつくったり、ストーブを囲んで、趣味や家族の話で和んだ。塩鮭などの日本食品は、野村吉三郎大使が抑留者への慰問として手配したものだという²⁰。このときの喜びは、句会の課題に選ばれる程であった。しかし何よりも、そしていつも気になるのは妻子の安否であった。

モンタナの老の手になる雪達磨 (たかし 第2回雪 1942.1.18)

ストーブを囲み語らふ妻の文 (愚山 第3回暖炉 ?)

モンタナの日本料理や塩サモン (泉流 第4回塩鮭 1942.2.2)

身にひめてミゾラで仰ぐ紀元節	(奇仙 第6回紀元節 1942. 2. 17)
妻病むとたよりあり日や春寒き	(十一 第6回余寒 1942. 2. 17)
冴えかへる夜半や子の夢妻の夢	(十一 第7回冴え返へる ?)

春の声を聞けば、野球に興じ、種を蒔いた。その一方で、西海岸防衛地区からの日系人強制立ち退きが実施される報が入ってくる。やがて自らも、移送されることになる。コココーラでの送別会であった。

雪解けて老の選手が球を投げ	(春雨 第8回雪解け 1942. 3. 10)
妻や子は行先迷ふ春浅し	(風人 第9回春浅し 1942. 3. 10)
種蒔きて立札てて移動かな	(春雨 第13回種蒔 1942. 4. 2)
コココーラの別杯寂しインタニー	(十一 第16回ソーダ水 1942. 5. 2)

ローズバーグ収容所

ニュー・メキシコ州のローズバーグ抑留所では、ミゾラ抑留所から移送された三原源治が「市長」に選出されると、早速、所外労働をジュネーブ協定違反だと抗議した。これをきっかけに、食料、衣服配給などの問題がからみ、ストライキ、日本人「市長」3名拘禁、抑留者射殺など当局との対立が続いた。問題が一応の解決をみるのは、8月中旬にずれ込む²¹。しかし句にはそうした軋轢や抗争を直接に読み込んだものはない。詠み手は時間をもてあまし、小さな蟻や、監視兵を監視している。そして妻子を懐かしむ。

百余度を裸で凌ぐインタニー	(風人 第1回裸 1942. 7)
小半日見て過ごしけり蟻の塚	(杏雨 第1回蟻 1942. 7)
手紙には夏瘦を省きけり	(一星 第3回夏瘦 1942. 8)
天の川消ゆるあたりに妻の住む	(一甫 第4回秋の星 1942. 8)
流星や忽然として監視台	(角笛 第4回秋の星 1942. 8)
露時雨夜警の兵は代わる頃	(紅雨 第5回露 1942. 9)
玉蜀黍の葉ずれに募る里心	(遺芳 第6回玉蜀黍 1942. 9)
カット飛ぶ球の白さよ秋暑し	(青柳 第6回残暑 1942. 9)

こうした句のなかで、第三回句会「蜥蜴」で最高点をとった句が

蜥蜴棲む砂漠に建つる二基の墓 (紅雨 第3回蜥蜴 1942. 8)

である。建てられたのは、監視兵によって銃殺された2人の病人の墓であろう。この墓もいずれは無縁塚になってしまうだろうと懸念する捕虜たちの無念の想いが、「蜥蜴棲む砂漠」という言葉に込められている。

やがて夏も終わり、秋になって、再び移送されて行く。妻子も内陸部に移動される。

妻や子のリロケーションや秋暑し	(無涯 第6回 1942.9)
明月や仰ぐ妻子も仮の宿	(泉流 第7回明月 1942.9?)
幽閉の柵を仰げば鳥渡る	(一星 第8回渡り鳥 1942.9)
色あせし官給服に朝寒し	(一甫 第9回朝寒 1942.9)
丹精の秋菜色濃し寮の横	(十一 第10回秋菜 1942.10)

サンタフェ抑留所

「川柳互選高原吟社」資料

度重なる移動を強いられ、サンタフェ抑留所に着いた抑留者を待っていたのは、食堂の火災であった。火災は全米のマスコミが報じ、家族から安否を尋ねる手紙が届くが、抑留者は通信上の制約で火事のこと是一切書けなかったという。度重なる移動も、火災も、結果としての炎天下野天の立ち食いも災難で、趣味に時を忘れるしかなかった。抑留生活も長くなり、それなりに慣れが生じていたのであろう。抑留所のなかではスポーツ、演劇、音楽、文芸などさまざまな趣味活動が盛んとなった。とくに化石拾いは、趣味と実益が兼ねられると、ブームであった。

家族へも火災の事は封じられ	(柳雨 1943.7.19)
災難と諦め趣味に日を忘れ	(笙州 1943.7.19)
七十の翁も飛ばすホームラン	(犬鈴 1944.9.19)
僕も今おかるの所作に若返り	(定吉 1943.8.2)
体験が光る野菜の出来具合	(塩出大州 1943.8.21)
桜でも植へたい配所に出来た庭	(雀喜 1943.9.30)
娑婆土産磨く辛抱の石の玉	(留意路 1943.8.11?)
所有欲無闇に石を拾ひ込み	(風人 ? 30回)
売店へ出して植打ちを笑ひ合ひ	(海風 1944.6.10)

趣味は彼らにとっては憂さ晴らしであったろう。最大の関心事は、「パロール」されて家族のもとに戻ることであった。

急しい身体お上に暇にされ	(蛙声 1943.7.26)
妻や子の努力も空しまだ別離	(大州 1943.7.26)
無駄と知り乍らも二度の請願書	(迷羊 1943.7.26)
富籤の様にパロール掲示され	(留意路 1943.7.26)
パロールの掲示未練が又覗き	(大洲 1943.8.13)

パロールされるには、審問でアメリカへの「忠誠」を当局に納得させなければならなかった。そのため、「パロール」に対する心境は複雑であった。

- 嘘誠たくみに織って柵を出る (風人 1943. 9. 1)
 インターンの誇りを捨てて柵を出る (北人 26回)
 居残つた誇を秘めて時を待ち (北人 26回)
 控え目に笑むパロールの得意顔 (大州 1944. 2. 29)
 インタンの姿残して撮る記念 (白津 1944. 2. 18)

パロールされないということは、アメリカ政府から「敵性」の強い「危険人物」であるということ、であれば、当然、日本政府から戦時「捕虜」交換要員に指名されるのではないかという期待も生まれる。

- レパトレーション我が名は漏れし掲示板 (凡苦楽 1943. 8. 13)
 日本行きまとも自分は選に漏れ (定吉 1943. 9. 11)
 辛抱せよやがて迎へは日章旗 (為風 1943. 8. 11?)

抑留所は「三食昼寝つき」の捕虜生活でなく、自治が許された。その実態はすなわち、炊事も掃除も自分たちで決めて行うことであった。

- 囚はれて妻の日課を体験し (太未雄 1943.8.21)
 ケーピー²²の一人とあつて蠅叩き (筑波 1943.8.28)
 洋行はキャンプの中で飯を炊き (笙州 1943.8.28)
 ありし日の自分も今日の皿洗 (定吉 1943.9.11)

家族に会えないのであれば、次善の楽しみは、たとえ検閲で切り取られていても、家族からの手紙であった。ときには、赤十字を通して交換船で日本からの通信も得られた。前線の子供からの手紙もあった。

- 監禁の荒む心へ娘の手紙 (風人 1943. 8. 18)
 横文字で子に出す手紙汗をかき (曲津 1943. 10. 15)
 大切のとこだけ穴のある手紙 (無声 1944. 10. 5)
 幾千里越えて日本の子の手紙 (回拝 1944. 10. 5)
 ふるふ手に見入る戦地の子の手紙 (塩出大州 1944. 3. 15)
 解放を待ちます涙ある手紙 (比佐子 52回)

ごくまれには家族の面会もあった。出征前の我が子がアメリカ兵として会いに来ることもあった。

- 暫くは逢ふた父子の口きけず (館岡北人 1943. 12. 7)
 出征の予感休暇が会ひに来る (木船 50回)

敵兵となつた息子の手を握り (三太笛 50回)

子が無条件の忠誠を誓って出征してくれた時期にパロールされたときの親の心境はいかばかりであつたらう。子が出征してもなお抑留され続ける想いはどのようなものであつたらう。

戦線の子の身替りに解放し (比佐子 52回)

子の血税払つて親はインタニー (三太笛 1945. 2. 22)

1944年12月には強制立ち退き令が解除され、一般の日系人は西海岸帰還が赦された。一方で、ツーリレーク隔離収容所の二世のあいだには市民権を放棄者が続出し、報国青年団のリーダーたちは次々と当局に逮捕され、「敵性外国人」としてサンタフェ抑留所に移送されてきた。彼らはツーリレーク隔離収容所のとくのように、早朝から体操とランニングで体を鍛えた。その姿をみて、心強いと感嘆する「老人」もあれば、血気にはやると冷ややかにみる「老人」もいた。日米戦争も最終局面を迎えるころには、こうした若者も落ち着き、スポーツや音楽や文芸に興じるようになった。

初日の出坊主頭の意気高し (風人 1945. 1. 15)

散切りの二世迎へて考へる (海風 1945. 1. 21)

のほせ症みんな坊主で隔離され (回拝 51回)

帰米二世指紋もすんで野球狂 (海風 62回)

収容所の閉鎖が決まる1945年末までには、抑留者の数も少なくなつてきた。高原吟社のメンバー数も減少している。政府の都合で、追い立てるように収容し、今度は閉鎖するので追い出そうとする。

掴まえて放つ小鳥に恩を被せ (風人 52回)

人力の不足は態よく追ひ出す気 (風人 1945. 1. 21)

ヘヤリング無理にも今度は出す兆 (迷羊 ? 61回)

戦局は圧倒的に日本には不利であつた。さまざまな情報が飛んだ。アメリカのマスコミ報道と、日本からの短波放送は大きく食い違ふ。戦局をどのように読むべきか、講師によって解釈が異なる。さまざまな情報が飛び交い、憶測がデマを呼ぶ。

取らし置き後殲滅か比島戦 (舟水 1945. 2. 22)

盲爆に神州一億火と燃えん (回拝 1945. 2. 4)

インタニー三人寄つてデマ飛ばし (回拝 1945. 2. 22)

そうしたなかでフランクリン・D.ローズヴェルト大統領が1945年4月12日死去した。天皇誕生

日の「佳節」にも半旗が掲げられていた。天皇誕生日の祝いは純粹に天皇への祝意だったのであろうか。

柵内で半旗横目に佳節の香 (舟水 54回)
仰ぎ見る半旗を前に感無量 (月山 54回)

60回ころにはすでに原子爆弾が投下され、61回には無条件降伏が告げられ、それでもなお日本への想いは断ち切れなかった。日本は負けたのか、負けるが勝ちなのか、日本の理想は生き続けるのか。最後まで、サンタフェ抑留所に残った、あるいは残されたものの意地であろうか。

暑気あたり忘れて寒し原子弾 (海風 60回)
風向きがどうあると我は西を向き (迷羊 61回)
無条件降伏デマの勝戦 (海風 62回)
負けて勝つ共栄圏の旗うらら (無声 62回)

『古多満』

『古多満』の句は一人2句と制限されたため、自分の「最上」の句を選んだからであろうか、抑留の心情を詠んだ句は比較的少ない。抑留所でみる風景をたんたんとして詠む写生句が短歌では、総歌数122のうち42、俳句では82のうち54、川柳では戦前の生活と思われる句が総数65のうち29ある。たとえば、

ロッキーの山連里サンタフェーあけし都に煙のぼれる (松田隆彦 18)
藍青に冴え渡りたる秋空も聖都は霧に朝つゝまれぬ (塩出大州 27)
崩れ行く土塀の家よ秋の月 (森田紅茶 43)
鴟鳴いて見上ぐる空の高きかな (鈴木素人 49)
丸だしの訛で世話が行き届き (安武雀喜 59)
無駄使ひすなと爲替入れてあり (館岡北人 61)²³

抑留の心情を詠んだと思われる句でも、それがいつの心境を綴ったのか、その背景は推察の域を脱し得ない。詠まれた日時が記載されていないからである。戦時下という時々刻々と変化する社会情勢と、社会情勢によって変化する心境とが、句にどのように反映しているのか、推察する上で必要な、日時という手がかりがない。とはいうものの、抑留所の日々繰り返される生活のリズムとその時々的心情を詠んだ歌や句には、一瞬を詠んだものでありながら、その一瞬が凍結して永遠となったように感じられるものもある。抑留されたものの生活と心情が、「普遍的な」生活感情として伝えられるからであろう。

ハワイから逮捕・拘禁・移送されてきた収監者は、手馴れない洗濯を干すときにも、本来はあたたかはずの器の、抑留所の金属製のカップの冷たさに凍えるときにも、あるいは妻子からの手紙にも、家族と「故郷」のぬくもりを想う。同室40名では、男として泣くこともできない。そ

の気持ちはカリフォルニアから移送された収監者も同じである。

- 洗濯物あらひものはせばすなはち凍て凝りぬしみじみ思ふ離り住む妻 (布哇 木村露声 11)
 列長く並ぶ食事の朝な朝なカップのひえの手にしみるかな (布哇 尾崎無音 12)
 さわさわと配所の夜を風なりて泣くことも出来ぬ寂しさとなりぬ (布哇 竹森岱峯 13)
 断ち難き心残して引かれ行く幼き吾兒よ永病む妻よ (布哇 安達涼雨 14)
 陰膳し朝な夕なに君の幸のみ祈りゐると書ける妻かも (布哇 丸谷秀岳 16)
 をくつきは俱にハワイに定めんと遠流のわれに妻は文せり (布哇 相賀溪芳 17)
 父帰り来らは絵本見むと待つ兒を思ひつつ夜となりにけり (加州 永瀬正臣 19)
 春の夜の燈かしの下にふなれにも手もとあやしく針を運びぬ (加州 伊勢田曉介 28)
 いとし子を学びに遠く送りたる寂しき妻の心偲びぬ (羅府 丸山千久万 33)
 赦されて出て往く友はにこやかに急ぐ我家は楽しかるらん (モンタナ 石川加賀男 28)

家族を想い、「故郷」となった移住地をなつかしむ一方で、交換船で届けられた緑茶を喫しながら、祖国を偲ぶ。二つの「故郷」が共存して詠者には違和感がない。

- 大君の大御心や下されし緑茶の香り身にしみわたる (加州 小池四良 20)
 月の白さ明治の御代とかはらねどわが立つ土はわが国ならず (桑港 齊藤文治 25)

俳句も同様である。収監への怒り、焦り、寂しさが秋冬の寂寞とした風景に重ねられている。「バブワヤー」(barbed wire)に近づけば、射殺される危険がある。それでもできるだけ外の世界に近づきたい。パロールされる友を見送れば、冬の月が煌々と照っている。その光は強く、影は濃い。孤独感が迫ってくる。

- さすらいの荒ぶ想ひや秋のゆく (布哇 徳城為風 43)
 落葉して夜な夜な風が鳴きに來る (布哇 立原鳴夕 44)
 バブワヤーに十歩の禁や雪深し (布哇 前原一星 46)
 見送りて吾が影一つ冬の月 (羅府 木下木船 52)

川柳では心情が短歌や俳句よりも平明な日常の言葉で、ときには皮肉や批判を込めて、詠み込まれている。パロールされる人への羨望と皮肉と焦りと入り交じり、短波を聞いて祖国を偲びつつ、戦場の我が子を案じる。炊事係として黙々と蠅を叩く男がたたき殺しているのは、自分の鬱憤だろうか。サンタフェ抑留所は「惨多不意」、惨憺たる不如意の場所であったのだろう。

- 走馬燈廻る舞台の明日を待ち (加州 山内不乱 59)
 懐かしく電波が聞かす国言葉 (羅府 谷無声 60)
 忠不忠子供の歳で腹を決め (加州 津田曲津 60)
 パロールも世渡り上手にして送り (華州 崎村白津 61)

成る様になれと云ふのに気があせり	(シアトル 中村迷羊 63)
西東同じ立場の柵住居	(シアトル 前野筑波 64)
黙々と小言も云はず蠅叩き	(シアトル 梶原風人 64)
殉国の二世に見出す血の立場	(シアトル 藤江海風 65)
食べものはこの程度ならと妻に書き	(羅府 竹本雨村 65)
真夜中に看守眠った首数へ	(シアトル 岩村清風 65)
監禁の苦を戦場の児に忘れ	(シアトル 赤堀沙人 66)
親と子と変った立場右左	(華州 平田頓馬 68)
手がやつと抜けて安堵へ子の志願	(加州 藤井孫六 68)
思ひ出は下駄を造った惨多不意	(加州 中谷春洋 69)

『銀塔』

上記の川柳と比べると、俳句は人事を詠んでも視線は自然へ帰結するように感じられる。「おかるの所作に若返る」のではなく、舞台の所作を忘れて、流れ星に目を移すのである。もの言わぬ親子は、おそらくは兵士の息子と抑留された父親であろう。それは春愁に転嫁される。下駄の音も思い出されるのはハワイの自然である。激戦の沖縄も夏の太平洋に想いが飛ぶ。夏の太平洋とは沖縄の海なのであろうか、それともハワイの海であらうか。

ロッキーの風の凄さよ返る	(出川紫洞 2)
観劇の目を奪ひたり流れ星	(福原月嶽 4)
阿鼻叫喚の世やカヨテ狂ひ啼く	(福原月嶽 4)
忍従に慣れし心や冬籠り	(福永緑星 6)
春の日を浴びつつ化石の山に行く	(泉流水 9)
生別のさびしさ夏の草に座す	(小林葛麓 14)
西南の息づまる思ひ残暑かな	(又野素洲 18)
秋の日の柵と並びて影と行く	(水戸川光雄 22)
手袋や二冬を手に合わぬまま	(望月芝蘭 24)
春愁やもの数云はぬ親と子と	(森田紅茶 27)
厳かな黙禱の背に冬日射し	(村上紅嵐 32)
下駄音の人なつかしや島の夏	(中川春岳 34)
当番の薪割る音の寒さ哉	(太田淡水 38)
石磨りの背に一杯の冬日かな	(重兼花雪 40)
春愁や夜半の壁打つ砂嵐	(斉藤芙蓉 41)
敵として散りし二世や流れ星	(三上三空 51)
壊滅か平和か夏の太平洋	(山本湖影 52)

おわりにかえて

本稿では、ミゾラ抑留所のミゾラ吟社俳句互選句会、ローズバーグ抑留所のユッカ吟社俳句互選句会、サンタフェ抑留所の川柳互選高原吟社句会、大館無涯編『古多満』（1944年）、プエブロ吟社同人編『銀塔』（1945年）を用いて、抑留所内の短歌、俳句、川柳を紹介した。けれども、これらの句会・歌会資料は抑留所で詠まれた短歌、俳句、川柳の一部に過ぎない。文献によれば、他の抑留所でも文芸活動はあり、また上記の抑留所内でも、扱った句会以外の同人活動は存在した。本稿は抑留所での文芸活動に関しては、あくまでも断片を扱ったにすぎない。同人たちの人脈や、結社およびそのメンバーの経歴や特質も分析されていない。

この数年シアトル日系人コミュニティでは、カルチュラルセンター（Japanese Cultural and Community Center of Washington）が、「国校」（シアトル国語学校）施設を補修・拡充して、活動の強化と歴史的資料の発掘・保存活動を行っている。その結果、長年研究者のあいだで探し求められてきた米国西北部連絡日本人会編の国語読本がほぼすべて発見された²⁴。またワシントン州ヤキマ市の博物館でも、日系人の歴史を特別展示（Land of Joy and Sorrow : Japanese Pioneers in the Yakima Valley）を2010年10月に行うことになり、現地の日系人から資料を収集している。この課程でも新たな資料が発掘されている²⁵。放棄されてしまう資料がある一方で、新たに日の目を見る資料もある。今後も埋もれた資料が発掘され、抑留所の文芸・芸能活動などの全貌が明らかになることを期待している。

注

1. The Commission on Wartime Relocation and Internment of Civilians, *Personal Justice Denied : Report of the Commission on Wartime Relocation and Internment of Civilians*, (Washington D.C. : Government Printing Office, 1982) 55.
2. 村川庸子, 桑井輝子『日米戦時交換船・戦後送還船「帰国」者に関する基礎的研究? 日系アメリカ人の歴史の視点から』（トヨタ財団助成研究報告書, 1992年）参照。
3. たとえば、移民研究会編『日本の移民研究 動向と文献目録』I & II（明石書店2008年）参照。
4. 星野治五郎『アメリカ生還記』（皇国青年教育協会, 1942年）；加藤万壽男『米国特派員婦朝報告敵国アメリカ』（同盟通信社, 1942年）；田口修治『戦時下アメリカで呼吸する』（昭和図書株式会社, 1942年）；赤坂正策『アメリカ監禁生活』（日本出版, 1943年）；中澤健『アメリカ獄中より同胞に告ぐ』（鱒書房, 1943年）；相賀溪芳『鉄柵生活』（布哇タイムズ, 1948年）；福田美亮『抑留生活六年』（金光教サンフランシスコ教会, 1952年）；古屋翠溪『配所転々』（布哇タイムズ, 1964年）；伊藤憲三『米国抑留記』（鹿島出版, 1971年）；野田岩次郎『財閥解体私記 私の履歴書』（日本経済新聞, 1983年）；木原静胤『嵐の中で開戦とスパイ容疑』（永田文昌堂, 1985年）；田名大正著, 田名とも編『サンタフェー／ローズバーグ抑留所日記』全4巻（山喜房佛書林, 1986年－1989年）；Donald E. Collins, *Native American Aliens : Disloyalty and the Renunciation of Citizenship by Japanese Americans during World War II*, (Westport, Con. : Greenwood Press, 1985) ; John Christgau, "Enemies" : *World War II Alien Internment* (Ames, Iowa : Iowa State University Press, 1985) ; Tetsuden Kashima, *Judgment Without Trial : Japanese American Imprisonment during World War II* (Seattle : University of Washington Press, 2003) ; Louis Fiset, *Imprisoned Apart : The World War II Correspondence of an Issei Couple* (Seattle : University of Washington, 1998) はワシントン大学特別資料室に保存されている家族間の書簡

を英訳したものである。

5. メールによる問い合わせ。また筆者自身の過去の調査においても同様の感触を得ている。しかしこのことが、文書館には全く保存されていないということの意味しないのも自明である。伊藤一男『北米百年桜正統』（日貿出版、1973年）、『アメリカ春秋八十年 シアトル日系人会創立30周年記念』（PMC出版、1982年）；越智道順『南加日本人史後編』（南加日系人商工会議所、1957年）他。
6. 抑留所収監日本人数などの記載は以下を参照した。越智220-343；Kashima 104-126；J. Burton, M. Farrell, F. Lord, and R. Lord, "Confinement and Ethnicity : An Overview of World War II Japanese American Relocation Sites" Chap 17, http://www.nps.gov/history/history/online_books/anthropolgy74/ce17.htm (2010年6月10日アクセス)。
7. Kashima, 118. 越智によれば357名となっている。越智265。
8. Kashima, 118.
9. 越智221. しかし実際には、越智も述べているように、家族キャンプであるテキサス州クリスタル・シティの抑留所に転送されるものも少なくなかった。
10. ノートに手書きされた同人一覧。JICA 横浜海外移住資料館所蔵資料。「ミゾラ吟社同人／モンタナ州ミゾラ収容所にて／一九四二年一月より七月／52人」、「リヴィングストン同人／ルイジアナ州フォート・リヴィングストン収容所にて／一九四二年六月より一九四三年六月」、「ユッカ吟社同人／ニューメキシコ州ローツバーグ収容所にて／一九四二年七月より一九四三年三月／49人」、「サンタ・フェ吟社同人／ニューメキシコ州サンタ・フェ収容所にて／一九四三年四月より」。
11. 上記名簿を比較。実名は以下を参照した。『ローズバーグ日本人収容所人名録』（人名録作成委員会、1943年2月）；『サンタフェ日本人収容所人名録』（サンタフェ時報社、1943年11月1日）；『サンタフェ日本人収容所人名録第三号』（日本人事務局発行、サンタフェ時報社印刷、1920年10月1日）。
12. サンタフェ「川柳高原吟社」には俳句吟社のような名簿はないので、あくまで判明した限りでの重複を探っただけである。
13. JICA 横浜海外移住資料館所蔵資料。
14. 平田東洋は、『サンタフェ日本人収容所人名録第三号』によれば、福岡県出身、ロサンゼルスに居住していた映画技師だった。この句会記録は入手が遅れたので、論考は今後の課題としたい。
15. Kashima, 109.
16. 表紙は褪色したためにグレーがかった紺色の布張りの厚紙で、MISSOULA/Dec. 1941-June 1942/LORDSBURG/ June 1942/SANTA FE/June 1943/SHIGEKICH KAJIWARA と記されている。梶原繁吉、風人のこと。梶原繁吉は山梨県出身、逮捕抑留前はシアトル市でクックをしていた。JICA 横浜海外移住資料館所蔵資料。Missoula はミゾラとも、美空とも表記された。松下巖によれば、「館府音頭」は三井物産シアトル支店勤務の人の作、「美空館府飯炊きの歌」は、加州から来た河野勇の作詩、「石拾ひ音頭」は松下巖の作であるという。ミゾラの表記には、「美層良」、「水浦」などさまざま提案されたが、冬の空の美しさから、美空に落ち着いたという。松下巖『猫のあくび』（一橋書房、1955年）214-221。なお『ローズバーグ日本人収容所人名録』から、大川音痴は、シアトル市の「社員」であった大川駿太郎と判断した。
17. 漢詩16名、抑留前住所はハワイ4、フレズノ2、シアトル、ロサンゼルス各1である。短歌が最も多く、63名、ハワイ24、ロサンゼルス16、サンフランシスコ4、その他加州11、シアトル4、その他4である。俳句は39名、ハワイ18、ロサンゼルス3、その他加州10、シアトル3、その他5である。新俳句はハワイ2、加州1の計3名である。川柳はシアトル10、その他のワシントン州5、ロサンゼルス4、その他の加州13、ハワイ1、計33名である。概観すれば、川柳はワシントン州で盛んであったことがわかる。
18. 桑井輝子『「旅という落ちつかぬ家で親となり」：「北米川柳」にみる1930年代の日本人移民社会』『白百合女子大学研究紀要』37号（2001年12月）119-140；Teruko Kumei, "Crossing the Ocean, Dreaming of America, Dreaming of Japan' : Transpacific Transformation of Japanese Immigrants in Senryu Poems, 1929-1941," *The Japanese Journal of American Studies*, 16 (2005), 81-110；Teruko Kumei,

“Record of Life and a Poem of Sentiments’ : Japanese Immigrant Senryu, 1929-1945”
Amerikastudien American Studies, vol 51 no. 1 (2006), 29-49.

19. () 内数字は句会の年月日。「？」は日付未記載である。
20. 伊藤一男(1982年) 103.
21. この間の事情に関しては、田名第1巻, 241-306; 伊藤(1982) 107-121参照.
22. KP (kitchen police) のこと。炊事兵であるが、ここでは炊事当番とでもいえようか。
23. () 内数字はページ数である。
24. 1980年代半ばに筆者は当該国語読本と、カリフォルニア州教育局の検定を受けた日本語読本の実物を見る機会を得た。1990年代にシアトル国語学校を訪れ、国語読本について尋ねたが、そのような本は見たことも聞いたこともないという返事であった。おそらく、日系人が強制収容所から帰還したときに、住居がなく、国語学校をホステルに転用したために、教科書類は破棄されたのだろうという話だった。しかし、テッド・マック (Ted Mack) ワシントン大学アジア言語文化学部准教授らが、倉庫の中にあった読本を発見したという。
25. 2010年9月10日訪問。